

第12回

住まいと

コミュニティ

づくり

活動助成



活動地域：沖縄県北中城村

概要：

沖縄県北中城村大城地区は、世界遺産に登録された「中城城跡」に隣接し、国指定の文化財「中村家住宅」がある文化遺産に恵まれた地域です。当団体は、「花と緑に囲まれた芸術の里」を地域づくりの基本構想とする大城地区において、地域の緑化を通して文化遺産を抱える地域にふさわしい景観づくりを行っていくことを目的に、55歳以上の男性を中心に結成されました。助成対象活動では、県道146号線を中心とした植栽の手入れや清掃などの定常的な活動のほか、大城地区全体を美術館に見立て住民の作品を展示する「週末美術館」、アマチュア演奏家によるコンサート「ムーンライトコンサート」、世界遺産をいかに地域づくりの中で活かすかを議論した「世界遺産ふるさとづくりシンポジウム」などを開催しました。応援団も増えてきています。沖縄県立芸術大学からは彫刻作品の寄贈の申し出があり、今後10年間で99点の作品が県道沿いに展示されることになっています。

〔大城花咲爺会〕

- ・ 代表者：外間 裕
- ・ 連絡担当者：新垣 秀昭
- ・ 連絡先：〒901-2314 沖縄県中頭郡北中城村大城 159 番地
- ・ TEL：098-935-3587
- ・ FAX：
- ・ E-mail：hide1942@tontonme.ne.jp
- ・ ホームページ：

1 団体の目的と経緯

目的：

住民のためだけではなく、来訪者が楽しく散策できるような花や緑を用いた景観づくり

経緯：

景観形成を意識的に推進している住民の中で中心的な役割を担ってきた中高年男性達が、村から提供されたランを植栽・管理するため団結して会を結成した。

北中城村大城区は、世界遺産「琉球のグスク群とその関連遺産群」の一つの「中城城跡」に隣接し、国指定重要文化財「中村家住宅」がある観光資源に恵まれた地域である。このような地域に観光地修景緑化事業として、1997年、村役場によって熱帯産のラン5,000本が中城城跡に通ずる県道沿いに植栽された。

村によって植栽されたといっても、村からはランや植え付け用の資材が提供されたのであり、区内に植え付けたのは老人会を中心とする男たちであった。毎週土曜・日曜日の午前中汗を流し、約3か月を要して植栽は完了した。その段階では、ランの管理について具体的な申し合わせはなかった。

そのような状況下で、男たちが集まるある会合で、「われわれが住む大城には、中村家住宅もあるが本土の武家屋敷と比較しても、スケールが小さく、ここを訪れる観光客は満足しているだろうか」という話題が出た。

中村家住宅を中心にして、集落全体を花や緑で埋めると素晴らしい景観が創り出せるのではないかと。そして、中村家住宅に来た観光客が集落を散策すれば、きっと満足してもらえるのではないかと、という意見に集約された。

このような話題が出たのは、ゴルフコンペの懇親会で酒を飲みながらである。酒の座の話題は「言いつぱなし」が多い。しかし、建設的ないい話であり、これを実現させるには、一歩踏み出す必要が

あった。そこで、1999年10月24日に「花咲爺会発足について」という簡単な企画書を作成し、現会長（外間裕）副会長（新垣秀昭・比嘉長太郎）が発起人となって、十数人の男たちを集めて話し合いをした。その結果は、会を発足させようということになった。

会の目的は、「いかにすれば古城周辺にふさわしい環境づくりができるのか、話し合い、実行する」ととし、会の名称を「大城花咲爺会」とすることに決めた。その名前には、枯れ木に花を咲かせた昔話の「花咲爺さん」の世界を現代に実現しようとの願いが込められている。

定例の活動は月1回とする。具体的には、集落内空き地への花の植え付け、道路沿いの花壇の手入れ、雑草の刈り取り、そして、村が植栽したランの管理などをすること。また、会員は55才以上の男性とすることなどが決められた。

活動範囲が拡大していくにつれて、月1回の定例活動では十分に管理することができなくなり、現在では月2回実施している。定例活動日には、草刈り清掃が終わった後に、「大城喫茶店」で反省会と称して、ビールを飲むのが常である。「大城喫茶店」という看板は掲げてあるが、飲み物持参の区民のサロンである。

男たちはビールを飲むと饒舌になり、いろいろなことを話す。聞き流してしまうと、単なる世間話で終わるのであるが、その中から拾い上げれば提案となるのである。「ムーンライトコンサート」の開催もその一つである。また、「週末美術館」の開催の発端もこの反省会での話題から生まれたのである。

このような活動が認められて、2001年は財団法人あしたの日本を創る協会主催「ふるさとづくり大賞」地域振興奨励賞、02年には社団法人日本観光協会主催の「花の観光地づくり大賞」努力賞を受けた。沖縄県知事からは、02年度緑化功労者表彰、03年度「沖縄ふるさと百選」に認定された。

また、04年12月には社団法人全国ウォーキング協会等が主催する「美しい日本の歩きたくなる道



県道沿いの草刈り清掃



公民館に通じる沿道に置かれたランとシーサー

500選」にわれわれが管理している道路が選ばれ、さらに、05年1月には沖縄観光コンベンションビューローが主体となって実施している「沖縄花のカーニバル」のモデル地区にも指定された。

2 活動の内容

緑化活動

芸術の里の実現

フォーラムの開催

1999年10月に当団体が発足して、主として県道146号線沿いの花壇や植栽樹に花を植える、歩道沿いの草刈りをするという活動をしてきた。当団体は、大城自治会の下部組織でもなく、単なる任意団体でしかなかった。

そのような団体が勝手に集落内を“いじる”ことでトラブルが発生しては困るので、自治会総会に「大城の地域づくり構想」を提案して、その構想の中で「花咲爺会」の活動を位置づけることにした。

この地域づくり構想は、当団体で素案をつくり2001年5月の自治会総会で承認された。以後、この地域づくり構想を実現するために、当団体も各種団体の一つとして活動ができるようになった。

大城の地域づくり構想のコンセプトは、「花と緑に囲まれた芸術の里づくり」である。「花と緑」については、行政サイドで整備した集落内のミニ公園に花を植えたり、県道沿いの花壇を手入れしたり、道路沿いに植えられた5,000本以上のランの手入れや、歩道沿いの草刈り清掃をすることにより、かなりの成果を上げてきた。

それでは、「芸術の里」をどう実現するのか。まず、陶芸家の作品（疵がある物が主）を手に入れて県道沿いに飾ることから始めた。そして、区民手作りのシーサーが置かれると、不思議と沖縄らしい景観が創り出されてきたのである。

また、「満月のころここで音楽を聴くと最高だろうね」、反省会での誰かのつぶやきが「ムーンライト

コンサート」の開催につながったのである。梅雨が明けると6月下旬から7月初旬の満月の頃に、アマチュアの演奏家による野外コンサートを開催し、演奏を楽しもうという趣向である。昨年までに3回実施して好評を博している。

次に検討したのが、区民総参加の芸術活動として、「スージグワー週末美術館」の開催である。集落全体を美術館と見立てて、11月初旬に芸術の秋にふさわしい行事の具体化である。小学校の生徒から、婦人会、老人会の会員まで幅広く参加してもらい、作品展を開催することである。作品としては、書道、絵画、墨絵、陶芸、手芸、写真、盆栽、工芸、園芸など多岐にわたり、共同制作として「面シーサー」をつくり、それを手づくりの穴窯で焼き上げるという本格的な陶芸にチャレンジしている。

また、地域の景観はそこに建つそれぞれの家が形づくることから、「我が家は芸術品」運動を推進しているが、週末美術館の開催期間中、多くの家に協力してもらい、「オープンガーデン」として開放した。村内外から訪れる人々が集落全体を散策することにより、好きなスージグワー（路地）に出会えることもあろうし、また、そこに住む人々との交流も図られるものである。

この他、期間中にミニコンサートを開いたり、プロの作品展を「中村家住宅」で開催して、多くの来訪者に鑑賞してもらっている。

あとの一つは、シンポジウムの開催である。

第1回は、「健康づくりフォーラム」を開催したが、何らかの活動をして地域づくりに関わることが、実は健康づくりにつながるという体験を語り合い、第2回は、「世界遺産ふるさとづくりシンポジウム」を開催した。このシンポジウムでは、世界遺産をいかに地域づくりに生かすべきかという視点で議論を展開した。この議論を基に、今後世界遺産中城城跡の活用策について、行政サイドに提言したいと考えている。

なお、草刈り等の定例活動以外の行事については、自治会との共催という形で実施している。



ムーンライトコンサートプログラム



ムーンライトコンサートでは500人を
超える聴衆が音楽を楽しんだ

3 活動の成果

地域の美化に貢献
サポーターの登場
中高年男性の活性化

当団体が活動を開始して5年半になるが、県道沿いが見違えるようにきれいになった。年中いろいろの花が咲き、歩道にはゴミが落ちていない。当団体の会員を中心に散歩するときには、歩道に落ちた煙草の吸い殻や紙くず、空き缶などを常に拾っているからである。

このように環境が整ってくると、応援団が現れるもので、沖縄県立芸術大学彫刻専攻科から、教官の作品と学生の作品を寄贈したいとの申し入れがあり、県道沿いに多くの彫刻を展示している。そして、芸大として今後10年間で99点の作品を寄贈することを決定して、大城区の地域づくりに協力することを表明している。99点であることから「彫刻カジマヤー計画」(カジマヤーとは白寿の意)と称している。

県立芸大との連携は、地域づくり構想の中に、「彫刻などの造形作品を展示して、彫刻のある風景を造る」ということの実現につながっているが、芸大関係者は、この文章を読んで、これほど彫刻を愛してくれる人々がいることに、いたく感動したと話している。大学と地域との連携として注目されている。

活動5年半で歩道沿いには花々が咲き、彫刻が設置され、ゴミが落ちていない環境が徐々にでき上がり、村内外から注目され、新聞、テレビで紹介されることが多くなった。その結果、視察団も多くなり、「うまくいっている秘訣は？」とか「どうして男だけですか」という質問を受ける。これに対しては「各人について参加が多いとか少ないとかは口にしないこと」、「終わった後のビールがうまい」と答えているが、それは事実であり、また秘訣であろうと思っている。

この地域が、まさに、「歩きたくなる道」に变身したので、村内のみならず、近隣市町村からもウォー

キングにやって来る人が多くなり、「ススキなどが歩道にはみ出してないので、車道に出たりすることもなく安全です」と言う声も聞かれる。また、車を運転する人からは、「見通しがよくて安全運転ができる」と外部からの評価は高い。

では、内部での評価はどうだろうか。家に引きこもりがちの中高年の男性を外に引っ張り出すことによる健康上の好影響が指摘されている。また、地域に貢献できるという生きがいづくりにつながったことも評価できよう。つまり、「健康づくり」、「生きがいづくり」、「地域づくり」が連動しているのである。

そして、花咲爺会の活動が活発になることによって、交流の輪が広がるとともに、区民の心のつながりが深まり、連携が図られているように思える。

4 今後の取り組み

特産品製作・販売
彫刻シンポジウムの開催

ムーンライトコンサートと週末美術館の開催は、今後とも継続して実施する予定であるが、村の財政が厳しくなり、2005年度から予算面での支援が打ち切られる状況にあり、開催費の捻出が課題となっている。

開催費の捻出との関係で、特産品を作り販売しようとの計画が話し合われている。われわれは、これまでの活動の成果として、「面シーサー(面獅子)」や小型の「チブル(頭)シ-サー」の制作を手がけ、自信がついてきたので、それを特産品にするというアイデアである。

その他、枯れ木に着生したランを特産品とすることも検討しており、週末美術館開催時に販売できるように準備にとりかかりたいと考えている。

大きな課題として、「彫刻シンポジウムの開催」がある。県立芸大とタイアップして夏休み期間中に開催したいという計画であるが、予算の目処が見つからないので、今後ともその実現に向けて検討したいと



「週末美術館」の区民作品展



オープンガーデンの様子(「菊の家」)

